

もうあのおそろしい集中豪雨も、夢のように五カ月過ぎてしまいました。

Sさんのことを考えると思い出たことばかり。今日となっても、Sさんはもうこの世の人ではないということには心にあっても、どこかにまだ生きていて、私の目の前に現われて来るような気がしてなりません。Sさんのことを考えれば、考えるほどどこかに生きているのではないかと思ってしまうのです。

Sさんが静かに目をとじてから、もう五カ月もたってしまいました。きつと天国には、なれたころだと思って安心しています。アルバムを開いては、Sさんの写真をみて、目をとじて五ヶ月前のことを思い出せば、楽しかったこと、苦しかったことなどが次から次へと浮かんで来るのです。

Sさんと私とは大の友だちでした。いつも私とSさんはほとんどいっしょに歩きました。クリスマスなどのときは、プレゼントを三度もくれました。それは小さな箱の中へ本の付録などを入れてくれました。その他、絵、シール、バッジ、本もくれました。このような物がかたみとなって残っているのです、見たたびに泣けてしまいます。

一年のときはグループがいっしょだったので、当番などは、仲よくやれました。Sさんは、私が体育館の掃除をしていると、自分の掃除を早くすませて、むかえに来てくれました。私の家に何度か遊びに来たこともありました。私の名まえを「Mチンタック」とか「Mチンカック」などと言って呼んでいました。Sさんは私がいうことを聞かないと、「よくもてめえ。」などとあら言葉をつかったこともありました。こんなことを思い出していれば、きりがなく思い出されてくるのです。

私が今一番残念に思っていることは、二十七日の休みにはいる前の日に、帰るとき、「あした版画の板を持ってきて、うつしめえよ。」とたく指切りをしておいて、そのことを実行できず、Sさんとわかれてしまったことなのです。あんなに明日の喜びを指切りしておいたことを、大西山のために消されてしまいました。私はくやしくてたまりません。Sさんもきつと天国で、私と同じ考えを持って大西山をどんなにうらんでいることでしょうか。

私たちのクラスでは、毎月二十九日にSさんとK君のお墓まいりにいくのです。私はお墓の前で手を合わせて、一ヶ月のできごと、楽しかったことなどを伝えてやるのです。そうすればSさんもK君も、うれしいことでしょう。お墓の前へ立つと、もり上がった土の下に、SさんもK君も安らかに眠っているのだと思うと、そのもり上がった土をほって、顔を見たい気がしてなりません。でも顔を見たいことばかり考えていると、どこかでSさんが、私の名をよんでいるような気もして、気が悪くなります。

でも、もう一度でいい。Sさんと仲よく楽しく遊んでみたい。Sさんの顔をじっくりみたい。こんな夢を持って、実際に、出会えるわけでもない。Sさんも夢を持って天国で私たちを見守ってくれる。大西山だけはにくんでいても、私たちだけは見守ってくれるにちがいない。安心して学校生活をして

いきたいと思います。

(三十六年)